

# 獣

中牟田 政也

今は末法の世である。  
国の根本たる朝廷が、二つに分かれている。  
根本が乱れているにも関わらず、末端が整うことなど、無い。  
この私度僧は勸進の道中、いくつも話を聞いた。

飢饉、略奪。  
地頭の私刑、農民の報復。  
居直り、泣き寝入り。  
強者はのさばり、弱者は虐げられる。  
話の結びは決まってこうである。  
「自らの力で、自らを救済する。自力救済しかない。」  
――俺も、同感だ。  
誰の手にも依らず、僧となった。  
正式に官の定めを受けず、僧となった者。それが私度僧である。

この僧に理想は、無い。  
仏の教えなど、よく知らぬ。  
形を変えた物乞いとして、勸進を行っている。  
――俺が救われるため、仏を利用して何が悪い。  
俺は、行基や空也のような、慈善家ではない。

冬の御笠川は寒い。  
橋は、この世とあの世、その狭間に浮かんでいる。  
――あの世に逝かされてはたまらぬ。  
橋は、所々が腐っていた。  
一步一步確かめながら、慎重に渡り終える。

北に四王寺山が見える。  
大宰府。  
ここがかつて、遠の朝廷（とおのみかど）と呼ばれたことは、僧も知っていた。  
僧は兵法など知らぬが、「山を背に、川を前に陣を張れ」、理想を体現したことだけは、見て取れた。  
それも昔のこと。  
辺りに漂う腐臭が、今の全てだった。

僧は懐から、茶碗を取り出す。  
私度僧となってすぐ、墓から拝借した。  
――こんな場所には、夜盗の類いしかおるまいな。  
ともあれ、人に会わなければ。それが僧の生業である。

廃屋の向こう側に、男の姿が見えた。  
黒い。右手に棍棒を引きずっている。  
全うな生業ではないだろう。  
――ならず者から、俺の元に財を移す。その罪を浄化してやるのだ。  
その財の出自がどうであろうと、構うものか。  
僧は、そのように考えている。

男が近づいて来た。  
一定の距離を保ち、声を張る。  
「浄財は、浄罪なり。生きる罪を、仏に浄化されたし。」  
僧は、いつもの決まり文句を言って、茶碗を差出す。

「へえ。」  
男は一度立ち止まり、左手で顎を搔く。  
「あんた、僧か。」  
「うむ。」  
「何やってんだ」  
「勸進である。浄罪である。衆生の罪を清めておる。」  
「てことは、あんたに与えると、俺の罪が浄化されるってのかい。」  
「うむ。そうである。」  
「じゃあ、俺がこれまでやってきたことも、許されるってのかい。」  
「悔いて行いを改むれば、そうである。」  
――いつものやり取りだ。運が良ければ、何かくれるやもしれぬ。

「もし、あんたに与えなかったら、俺はどうなる。」  
「その罪で、地獄に落ちるであろう。」  
「いまも地獄なのにか。」  
「うむ。地獄とは、今生よりも、ずっと酷いものである。」  
「そんなにか。」  
「うむ。そこでおぬしは必ず、後悔するであろう。」

男が近づいて来た。  
――寄越すか去るか、さっさとしろ

「で、あんたは何だ。」  
「み仏の使いとして、衆生を救っておる。」  
「誰でもみんな救うのかい。」  
「うむ、み仏は、誰をもひとしく救うのである。」  
「てことは、あんたは、みんなを救うのか。」  
「うむ、その使いである我もまた、そうである。」

「そうかい。そうかい。」  
男は棍棒を逆手に持ち直し、足下に突き立てる。  
千切れた雑草の間から、カマドウマが飛び出して来た。  
男が力を込める。血と垢に塗れた手が、白くなる。  
右に、左に。三たび、四たび。  
執拗に狙う。  
男の鼻息が聞こえる。

虫は脚を潰され、異常な痙攣を起こしている。  
棍棒が襲いかかる。  
必死にもがく。のたうち回る。  
砂が飛び散る。  
男はなおも、追い打ちを掛ける。  
棍棒を差すたびに、捻ってすり潰す。  
しかしなんとか、この哀れな虫は、草叢に飛び込んだ。  
すぐに姿が見えなくなる。

男は大振りに、左脚で地面を蹴り払う。  
地面が抉られ、土塊が飛んでゆく。  
男の舌打ちが聞こえた気がした。

男は一つ、嫌な咳をしたあと、向き直る。  
「あんたが正しくて立派なのは、よくわかった。」  
棍棒を地面に突き刺し、掌で先端を抑える。  
体重を預けると、男の右肘が大きく張り出す。  
雑に継いだ袖は、半ばで破れている。  
胸板が上下する。  
吐息が白い。妙な呼吸音がする。  
はだけた服の隙間からは、胸毛がちらつく。  
肌は浅黒い。地黒なのだろうか。  
風の落ちた怒り肩に、癖毛の髪が掛かる。  
首にまで顎髭が広がる。揉み上げとの境は無い。  
頬の毛は、口髭と繋がりそうだ。  
黒く覆われた顔の中で、鼻先だけが赤い。  
男と目が合った。

湿った風が吹いた。  
「だがな。」  
男は左手で、皮脂でべつついた髪を掻き上げながら、こう続ける。  
生え際に、吹き出物の跡が見える。  
野犬の臭いがする。  
――3日は、身体を洗ってないな。  
僧は、気取られないよう、口だけで呼吸をする。  
迂闊に獣を刺激すると、何をされるかわからない。

「御託はもういい。」  
嫌な咳をする。  
再び目が合う。

「俺ひとりくらい救え。」

僧は一瞬、言葉に窮した。  
僧になったのは、自らが救われたいがため。  
それを見抜かれた気がした。  
僧になる前のことを思い出す。

暗闇。塵と蜘蛛が同居人だった。  
日没で目を覚ます。  
一日は、生き延びた後悔と共に始まる。  
猫背で、腕をだらりと垂らし、炊事場へ向かう。  
味気のない食事を摂る。

寢床に戻り、昨日、何もできなかったことを後悔する。

その後悔から逃れるために、眠る。  
後悔と共に目覚める。  
後悔とそれに伴う孤独は、人間の心を奪ってゆく。

思考が鈍ってくる。後悔が減ったのは幸いだ。  
聴覚・嗅覚が冴えてくる。  
家の軋み、動物の足音、食物の臭い。  
微かな違いがわかるようになる。  
――今日は2日目だな。  
前回水浴びしてからの日数を、自分の臭いで数える。  
日付という感覚も、次第に意味をなさなくなる。

荒れた地には四足歩行が適している。  
――動きやすく、使い勝手が良い。  
腕を2本失う。  
代わりに、新たに脚を2本手に入れる。  
なぜ今まで、こうしていなかったのか。  
前脚の腹を眺めながら、不思議に思う。

食事を摂る。  
便所・浴室・炊事場・食卓。  
獣にとって、それらの区別に意味はない。  
食物を取り出す。  
臭いを嗅ぎ、少し舐める。  
やや乾いているが、問題ない。  
齧りつく。  
口から溢れ出る。  
地面に落ちる。獣に食器は不要だ。  
時折、拾って口に入れ、指を舐める。  
指と爪の間まで味わう。塩味がうまい。

喰らう。  
それが、獣の姿だった。

「そりゃ無理だよな。でも、気にすることはねえ。」  
男は棍棒を持ち替えると、右脚で蹴り上げ、そのまま肩に担ぐ。  
僧の肩を叩き、脇を通り抜けようとする。  
――しまった。  
僧は慌てて言葉を繋ぐ  
「まで。み仏は、誰をも救ってくれる。だから」  
しかし、僧はそれ以上、言葉が続けることができなかった。

臭い。  
あまりの臭気に耐えかねて、咽せる。  
穴という穴から、臭いが入ってくる。  
目を潰される。  
喉から鼻に逆流してくる。  
粘膜に絡み付く。吐きそうだ。  
――こやつ、いったいどれほどの獣を飼っている。  
両手を膝に付く。  
立ってられない。  
男は脚をとめると、屈み込み、下から僧を覗き込む。  
――これ以上寄るな。  
僧は大きく仰け反り、川面を向く。  
少しでも離れなければ。

「ははは、あんたも、よくわかってるじゃねえか。」  
「自分を救ってくれるのは、自分だけだよな。」  
男はひとしきり笑うと、立ち上がり、対岸へと渡っていった。